産業と有用性*

アンリ・サン＝シモンに見られるJ.-B. セーの影響と思想的展開

白瀬 小百合

はじめに

代表的な著作のタイトル、『産業』(*L'Industrie,* 1816–1818)や『産業体制論』(*Du système industriel,* 1820–1821)、『産業者の教理問答』(*Catéchisme des industriels,* 1823–1824)等から見てとれるとおり、アンリ・サン＝シモン(Henri Saint-Simon, 1760–1825)の思想は「産業(industrie)」、「産業的／産業者(industriel)」という語によって特徴づけられている。今日、サン＝シモンは19世紀フランスにおいて産業主義(industrialisme)を提唱した思想家として知られている。フランス革命という政治・社会体制をめぐるかつてない転換点を経て、どのように今後の社会を構築(もしくは再構築)すべきか、という問いがサン＝シモンの思索の出発点にあり、その思想を一言で要約するならば、「産業」概念を主軸としながら、産業を基盤とした社会の構築を目指したもの、と言うことができるだろう。彼が行なった産業と社会にかんする思索は、のちにさまざまな発展・理論化を遂げることになる19世紀社会学の源流をなすものとして位置づけられ、サン＝シモンの思想を背景として、一方ではコント、デュルケムらによって社会学が体系化され、他方ではプルードン、マルクスらの思想が導かれたと考えられている[1]。

サン＝シモンの思想はのちの社会学の呼び水となったが、彼自身は同時代の政治経済学に多くのものを負っている。彼は同時代の政治経済学者ジャン＝バティスト・セー(Jean-Baptiste Say, 1767–1832)から大きく影響を受けており、とりわけセーから「産業」、「生産」、「有用性」の三つの用語を取り入れている[2]。しかしながら、サン＝シモンとセーにおいて、これらの用語の意図するものや、その射程は完全に同一ではない。サン＝シモンは政治経済学的な着眼点を継承しながらも、政治経済学として自身の理論を発展させることはせず、社会そのものの組織に関心を傾けた。彼の思想はいわば政治経済学と社会学の中間に位置しており、その点においてまさに彼の思想の独自性があると考えられる。

本論文では、サン＝シモンとセーの著作に共通して現れる「産業(industrie)」概念とそれに付随する「有用性(utilité)」[3]について検討を行なう。サン＝シモンに見られるセーの影響については、中村の論文やミュッソの著作において考察がなされているが[4]、両者に見られる共通点の指摘が中心であり、相違点についての指摘は少なく、両者の相違が表す思想的意義についての詳しい検討がなされていない。「産業」、「有用性」のそれぞれの用語について、サン＝シモン、セーに見られる共通点と相違点を明らかにし、比較を通じてサン＝シモンの概念の射程を明確化することが本論文の狙いである。

また、2012年にフランスで初となる校註版『アンリ・サン＝シモン全集』(全4巻)が刊行され[5]、当該分野の研究環境に大きな変化がもたらされたことを記しておきたい。これまで広く参照されてきた著作集には含まれていなかった草稿や手稿類が数多く収録され、森による邦訳『サン-シモン著作集』(全5巻)にも訳出されていないテクストが容易に参照できるようになった[6]。日本、あるいはフランスにおいても、この新たな全集を用いた二次的な研究は、まだ端緒についたばかりである。アクセスの困難さによって先行研究ではあまり取り上げられてこなかったテクストも参照しつつ、サン＝シモンの思想に改めて光を当てたい。

本論文の構成は以下のとおりである。サン＝シモンがセーの「産業」、「有用性」概念を参照している、という影響関係を踏まえ、まずセーの『政治経済学概論』(*Traité d'économie politique,* 1803 ; 2e éd. 1814 ;

---

* 本論文は第39回社会思想史学会(2014年10月25–26日、明治大学駿河台キャンパス)における自由論題報告、白瀬小百合「アンリ・サン＝シモンの「産業」概念と社会」に加筆・修正を加え、議論を発展させたものである。また、本論文は日本学術振興会特別研究員奨励費の助成を受けた成果の一端である。ここに記して謝意を表したい。

1 Georges Gurvitch, « Introduction », C.-H. de Saint-Simon, *La physiologie sociale. Œuvres choisies,* Paris, Presse universitaire de France, 1965 ; Christien Laval, *L'ambition sociologique* [2002], Paris, Gallimard, 2012. ギュルヴィッチ、ラヴァルに共通して見られる点であるが、いずれにおいてもマルクスの(あるいはマルクス主義の)思想は社会学のひとつの潮流としてとらえられており、これとコント、デュルケムに担われたいわゆる「社会学」が対置されている。

2 Pierre Musso, *Saint-Simon, l'industrialisme contre l'État,* La Tour d'Aigues, L'Aube, 2010, p. 39.

3 経済学においては、一般的にutilitéには「効用」の訳語が当てられるが、サン＝シモンにおけるutilitéは必ずしも経済学における「効用」概念と一致しておらず、より広い射程を持ちうる用語である。サン＝シモンとの比較を試みる都合上、セーにおけるutilitéについても本論文では一貫して「有用性」の訳語を用いる。サン＝シモンにおけるutilitéについては、本論文第2節、第3節において論じる。

4 中村秀一「「社会」が「会社」であるような　サン＝シモンの産業主義」『現代思想』vol. 19–8、1991年。Musso, *op. cit.*

5 本論文においてサン＝シモンのテクストの引用はこの校註版全集に依拠する。Henri Saint-Simon, *Œuvres complètes,* vol. 4, Paris, Presse universitaire de France, 2012. 以下、本書をOCの略号で示し、参照箇所の巻号とページ数を表記する。なお、引用文はすべて新たに訳出を行なったが、邦訳が存在するテクストについては、OCの参照箇所に続けて『サン-シモン著作集』(森博編・訳、全5巻、恒星社厚生閣、1987–1988年、以下『著作集』)の該当箇所を示す。

6 19世紀にサン＝シモン主義者たちによって刊行された著作集(*Œuvres de Saint-Simon,* Paris, Dentu, 1868–1875)や、そのリプリントであるアントロポス社版(*Œuvres de Claude-Henri de Saint-Simon,* Paris, Anthropos, 1966)はサン＝シモンによって書かれていないテクストが含まれ、また配置に時系列を欠くなど不備や遺漏が多くあった。1980年代に日本で刊行された森による『サン-シモン著作集』は、未刊の草稿・手稿類の翻訳を含み、精緻な異文照合が行なわれている点で、これまで国際的に見ても非常に充実した著作集のひとつであった。

3e éd. 1817)[7]を主たる手がかりとして、セーにおける両概念に検討を加える。続いて、サン＝シモンがとりわけ「産業」に強調点を置くようになる1810年代後半から1820年代初頭の著作を中心に、彼が提示する「産業」概念と「有用性」との連関を取り上げる。最後に、サン＝シモンとセーの間に見られる「産業」、「有用性」概念の相違が示す意義を、サン＝シモンの社会組織構想と結びつけて論じたい。

1 ジャン＝バティスト・セーにおける「産業」と「有用性」

19世紀における産業主義の思想家としては、まずサン＝シモンの名を挙げることができるだろう。だが、この時代に産業の重要性を説いた論者は彼ひとりだけではなかった。シャルル・コント（Charles Comte, 1782–1837）とともに『ル・サンスール』誌（*Le Censeur,* 1814–1815）[8]を主導したシャルル・デュノワイエ（Charles Dunoyer, 1786–1862）も、経済的自由主義の傾向をより色濃く保ちながら、サン＝シモンとは別様の仕方で「産業主義者」を自任した論者である[9]。グイエによれば、19世紀の産業主義思想は「ある種の知的流行」であり、それを準備したのがジャン＝バティスト・セーによるアテネ・ロワイヤル（L'Athénée royal）[10]での政治経済学の講義と、彼のさまざまな著作であったという[11]。また、セーによる産業主義への貢献は「人々がしばしば想像するよりもずっと直接的」であり、「［産業主義的な学説は］少なくとも本質的な要素については、潜在的な形ですでにセーの『概論』に含まれている」と、アリックスは指摘している[12]。事実、セーは『政治経済学概論』において、経済的な領域における「産業」の位置づけを問いに付しており、「産業」の語が示す領域や活動の定義を試みている。

ジャン＝バティスト・セーの政治経済学講義は、1816年から1819年にかけて断続的にアテネ・ロワイヤルで行なわれていたものが有名である[13]。しかし、この時期以前にもセーの講義が行われており、そこにサン＝シモンも参加していたと思しき痕跡が1813年7月24日付けの彼の手紙に見られる。従兄弟のド・モンモランシー氏に宛てて、サン＝シモンは以下のように綴っている。「謹んで、セー氏の講義第二課のための切符をあなたにお送りいたします。［…］パリの銀行家、仲買人、製造業者の有力者たちは、セー氏の講義に申し込み、開講に立ち会うべきでしたのに、と申し上げます」[14]。サン＝シモンがセーの著作や思想に深く感銘を受けていたことは、彼の著作からも見受けられる。セーのアテネ・ロワイヤルでの講義と執筆時期が重なる『産業』において、サン＝シモンはセーの政治経済学に惜しまず賛辞を送っている。『政治経済学概論』は、「政治経済学が今日までに発見し、明らかにしてきたすべてのもの」を含んでおり、「ヨーロッパにおけるこの科学の最高峰」であるとして、高く評価されている[15]。

セーの「産業」概念を取り上げる前に、まず「産業（industrie）」の語源と、18–19世紀における一般的語義を確認しておこう。industrieは、「活動（activité）」や「応用（application）」、「勤勉（assiduité）」を意味するラテン語、industriaを語源に持つ[16]。「産業」の語がフランス語に現れたのは14世紀にさかのぼるが、当時この語は何らかの物事を遂行するための創意に富んだ巧みさを意味していた。経済活動の発展を受け、18世紀頃からindustrieはより近代的な意味を持つようになっていく。この頃から「富の流通と生産に貢献する活動の総体」が意味されるようになり、この語意は19世紀までもっとも一般的であったとされる。

セーが経済活動を分析する際に「産業」の語を重視した背景には、アダム・スミス（Adam Smith, 1723–1790）の思想の不備を補い、より体系的な理論として発展させるという狙いがあった。「物に価値を与えるものを求めて、スミスは人間の労働こそがそれであると考えているが、これは産業と呼ぶべきものであった。なぜなら、産業の語は労働の語が含まない諸部分を包含するからである」[17]と考え、セーは労働のみへの着目では、経済全体を考察するために不十分であると論じている。スミスのもっともよく知られた理論のひとつ、労働価値説において、労働が物に与える価値は以下のように定義づけられている。

> ［…］ある商品の価値は、その商品を所有し、かつそれを使用するつもりも消費するつもりもなく、他の商品と交換しようと思っている人にとっては、それによって彼が購買または支配しうる労働の量に等しい。したがって労働がすべての商品の交換価値の真の尺度なのである。［…］それらの［貨幣または品物で買われる］ものは一定量の労働の価値を含んでおり、それをわれわれは、そのときに等量の労働の価値を含んでいると考えられるものと交換するのである[18]。

---

7 Jean-Baptiste Say, *Traité d'économie politique* [1803], Osnabrück, Otto Zeller, 1966. 以下TEPの略号で示す。

8 ナポレオンの百日天下後、第二次復古王政初期から新政府批判を展開した『ル・サンスール』は、1815年に発行停止の処分を受けるが、のちに『ル・サンスール・ユーロピエン』（*Le Censeur européen,* 1817–1819）の名称で復刊を果たした。以下を参照。Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle* [1866–1879], Genève-Paris, Slatkine, 1982, *s. v.* « Censeur (Le) », « Dunoyer (Barthélemy-Charles-Pierre-Joseph) ».

9 デュノワイエの産業主義について本論文では取り上げないが、サン＝シモンの産業主義との比較検討を行なった邦語の先行研究に岩本吉弘の論攷がある。岩本吉弘「シャルル・デュノワイエと「二つの産業主義」　王政復古期フランスにおける産業主義と自由主義」（前）（後）、『一橋論叢』第117巻2号、第118巻2号、1997年。

10 成人を対象とした私立の教育機関。知識人や文人たちが公開講座を実施しており、バンジャマン・コンスタン（Benjamin Constant, 1767–1830）も講演を行っている。アテネ・ロワイヤルは、1781年にピラートル・ド・ロジエ（Pilâtre de Rozier, 1754–1785）がミュゼ（Musée de Paris）の名称で創設し、その後リセ（Lycée）に改称、1803年にアテネとなった。復古王政に呼応し、この時期は「ロワイヤル」の形容詞が付されていた。Charles Dejob, *De l'établissement connu sous le nom de Lycée et d'Athénée et de quelques établissements analogues,* Paris, Armand Colin, 1889 ; *Id., L'instruction publique en France et en Italie au dix-neuvième siècle,* Paris, Armand Colin, 1894.

11 Henri Gouhier, *La jeunesse d'Auguste Comte et la formation du positivisme,* t. III, Paris, Vrin, 1970, p. 32.

12 Edgar Allix, « J.-B. Say et les origines de l'industrialisme », *Revue d'économie politique,* t. 34, 1910, p. 303.

13 セーのアテネ・ロワイヤルでの講義は1816年、1817年、1819年に開催されたと推定されているが、アテネ・ロワイヤルの記録文書が焼失しているために正確な年は定かではない。Philippe Steiner, « Note sur l'édition des textes », Jean-Baptiste Say, *Cours d'économie politique,* Paris, GF-Flammarion, 1996, p. 37–38.

14 OC, t. II, p. 1774, note 182.

15 *L'Industrie,* OC, t. II, p. 1497.『著作集』第2巻、346ページ。

16 *Le Grand Robert de la langue française,* Paris, Dictionnaire le Robert, 2001, s. v. « industrie ».

17 TEP, p. 28.

18 Adam Smith, *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations,* Petersfield, Harriman House, 2007, p. 20（『国富論』（一）、水田洋監訳、杉田忠平訳、岩波文庫、63–64ページ）.

スミスにおいても労働と交換は経済活動の内部に当然含意されている。しかしこれら二つの行為は性質を異にするものであって、商品の価値を定めるのは生産するために傾けられた労働の多寡であり、交換はそれぞれの品物をやり取りする行為でしかない。一方、セーは「価値は労働の作用というよりはむしろ、自然が人間に与える諸要因の作用および資本の作用と結合した人間の産業に起因する」と考える[19]。つまり、物質的な労働や生産活動のみならず、資本のはたらきなど、より広範にとらえられた産業が品物に価値を与えているとセーは言う。人間のさまざまな必要を満たすためには、自然から与えられたものを加工したり、出来上がった商品を移動させたりする必要があり、もろもろの産業がそれを可能にするととらえられている。セーは産業に三つの区分を導入し、「農業的産業(industrie agricole)」、「工業的産業(industrie manufacturière)」、そして「商業的産業(industrie commerciale)」の三種が産業を構成するとしている。

ところで、それ自体としては物質的な生産物を作り出さない「商業的産業」が、物を作りだす「農業的産業」や「工業的産業」と同様に価値を創出することは、どのように説明づけられているのだろうか。セーは「産業」による作用と「有用性(utilité)」を結び付けることで、それぞれの産業に生産的性格を与えている。

> ある何らかの有用性を持つ品物を作ることは、富を作ることだと言えるだろう。なぜなら、物の有用性は価値の第一の基盤であり、こうした価値は富である。[…]われわれにできることとは、[世界を構成する]素材を別の形で再生産し、以前には持たなかった何らかの用途を与えるか、あるいは、ただその素材が持ちうる価値を増加させるかである。ゆえに、ここに創造がある。素材の創造ではなく、有用性の創造である。そしてこの有用性が物質に価値を与えるため、富の創出があるのである[20]。

したがって、一見物質的な生産を行っているかに見える農業的産業、工業的産業についても、セーにおいては着目すべきは有用性の創造であり、それに伴う富の創出だということになる。物に有用性を付与するはたらきにより、農業、工業、商業のそれぞれの産業はいずれも、ある商品に価値を与えることが可能になる。セーは後年の著作『政治経済学問答』(*Catéchisme d'économie politique,* 1821)において、商業による有用性の創出について、より詳細な解説を加えている。

> [商業的産業は]ある生産物が使用されない場所、少なくともその使用が広まっていないか、価値を持たない場所でその生産物を得る。そしてその生産物がより広く使用され、生産が容易ではなく、盛んには行われておらず、生産するのに高くつく場所にそれを輸送する[21]。

生産物をある場所から別の場所へと輸送し、「それを必要とする人々の手に届くようにする」[22]ことで、その品物が持つ有用性と価値を増加させる。こうしたはたらきにより、商業的産業は農業的産業、工業的産業同様に、価値＝富を生み出す生産活動であるとみなされるのである。

このように「有用性」の概念は、セーによる「産業」の定義、分類と分かちがたく結びついていることがわかる。セーは有用性を「どのような仕方であれ、われわれに役立ちうる」性質と定義づけている[23]。指輪や造花など、価値を持ちながらも理性的な観点からは役に立たないとみなされうるものを例に挙げつつ、空腹のような身体的な欲求(besoin)のみならず、どのような欲求や欲望(désir)であれ、それらが満たされるならば、その品物には有用性があるとセーは述べる。セーにおいて「産業」とは、ある生産物の有用性を創出、あるいは増加させる活動であり、人々が欲求や欲望を満たすならば、その生産物は有用性を持つとみなされる。セーが論じる「産業」と「有用性」の一連の結びつきについて、生産物の存在が不可欠であるという点に留意しておこう。

2 サン＝シモンにおける「産業」概念

さて、ここからはサン＝シモンの提示する「産業」概念に考察を加えていくが、まず彼が産業を主軸に据えて思索を行なった背景に目を向けておきたい。冒頭で触れたとおり、革命後のフランス社会に対する批判が彼の思索の根幹をなしている。1810年代後半から1820年代初頭までに執筆された主著『産業』、『産業体制論』では、フランス革命とそれによって築かれた社会の不完全さに対する批判がしばしば展開されており、革命についてサン＝シモンは以下のように考察する。

> 革命の実際の目的は現在まで達成されなかったし、まさにそうであったために、この目的はなおのこと存在し続け、十全な力と広がりを持って存在し続けている。[…]というのも、個人についてと同様、政治体についても、いかなるものであれ真の欲求は満たされるまで必然的に持続し、満たされるのがより長く遅れるほど、いっそう多くの力を伴って顕著になる。[…]したがって、革命が終わるには程遠く、物事の経過が革命に与えた目的の完全な達成、すなわち新たな政治体制の成立によってしか、革命を終わらせることはできないのだ[24]。

革命により新体制を樹立する上での障害は取り除かれたが、確立されるべき体制にはいまだ到達しておらず、したがって革命は30年来継続した状態にあるとサン＝シモンはみなしている。「18世紀は破壊しか行わなかった。われわれは少しもこの仕事を続けようとはしない。われわれが企図していることは、反対に、新たな構築物の基礎を築く

[19] TEP, p. 32.
[20] *Ibid.,* p. 57–58.
[21] Say, *op. cit.,* 1996, p. 319.
[22] *Ibid.,* p. 320.
[23] *Ibid.,* p. 315.
[24] *Du système industriel,* OC, t. III, p.2353.『著作集』第4巻、37ページ。

ことである」[25]と『産業』の趣意書でも述べられているとおり、打ち倒された旧来の制度にとって代わる、19世紀に相応しい新たな社会体制の構築が必要とされている。サン＝シモンが目指す新たな体制とは、「産業」に基盤を置き、産業者階級が高い地位を占める「産業社会(société industrielle)」である。革命によって封建制度は打倒されたものの、産業に携わる人々が社会において依然として低い地位に身を置き、自らは生産活動を行わない特権階級が高い地位を保ち続けていることを、彼は問題視する。

「産業は社会存立の唯一の保証であり、あらゆる富とあらゆる繁栄の唯一の源泉である」として、サン＝シモンは「社会全体が産業に基礎を置く」[26]と述べるが、ここで用いられている「産業」の語には、同時代においても独特な意味づけが行なわれている。前節で見たとおり、18–19世紀の「産業」の一般的語義は「富の流通と生産に貢献する活動の総体」であったが、主著『産業』においてサン＝シモンは以下の定義を提示している。「もっとも一般的な意味で理解された産業、理論ならびに応用、知的労働ならびに肉体的労働といった、あらゆる種類の有益な労働を包含する産業」[27]。この非常に広い意味でとらえられた「産業」概念は、「生産(production)」あるいは「生産的(productif)」であることを重視する視点によって特徴づけられている。

「産業」が含みうる「あらゆる種類の有益な労働」を例示するために、『組織者』(*L'Organisateur,* 1819–1820)では、40種類以上に及ぶ職業が挙げられている。この例示は学者や科学者(物理学者、化学者、生理学者等)にはじまり、続いて芸術家(詩人、画家、彫刻家等)が列挙され、そして最後に銀行家、商人に加え、農耕者とさまざまな分野の職人(石工、大工、指物師等)によって締めくくられる。これらの職業は科学分野、芸術分野、技術工芸分野に属し、それぞれの分野で働く者を「生産者(producteur)」としてサン＝シモンは位置づける。

> これらの人々はもっとも本質的に生産的なフランス人であり、もっとも重要な生産物をもたらし、国民にとってもっとも有益な労働を主導し、科学、芸術、工芸の分野で国民を生産的にする人々であるため、彼らは真にフランス社会の精華である[28]。

先に挙げた『産業』での定義(「あらゆる種類の有益な労働を包含する産業」)に従えば、例示された多種多様な職業はみな「産業」の範疇におさめられ、なおかつそれぞれの生産行為の持つ有用性が高く評価されていることが見て取れる。知的労働、肉体的労働の区別なく、国民に何らかの有用性をもたらす労働が、サン＝シモンの「産業」概念のもっとも根底的な部分をなしていると言えよう。学者、科学者、芸術家を産業者階級に含めるかどうかという点については、著作によって多少の異同が見られるが[29]、彼らが人々に何らかの有用性をもたらす生産的活動に従事しているという位置づけは一貫している。サン＝シモンが「産業」にとりわけ大きく力点を置くようになるのは1810年代後半以降だが、初期の著作においても、科学、芸術、産業の三項を社会組織において重視すべきだという意見は表明されていた。1804年に書かれた手稿『二人の博愛家の手紙』(*Lettres de deux philanthropes*)で、サン＝シモンは社会組織について下記の提案を行っている。「科学、芸術、あるいは産業に有益な発見をする人々に金銭的な報酬を与える。[…]産業の道で傑出する人々に対し、議会は多くの金銭を与えるだろう」[30]。この時点ですでに、サン＝シモンが科学、芸術、産業という三つの活動領域に着目し、とりわけ「産業」に携わる人々を評価する方向性を示していたことがうかがえる。

以上の点において、セーの提示した産業の三区分からさらに拡大された産業の範疇をサン＝シモンが有していることが見て取れるだろう。セーは農業、工業、商業を「産業」として位置づけていたが、サン＝シモンにとっては科学、芸術の分野に携わる人々も「生産者」すなわち「産業者」であり、したがって彼らの活動も「産業」に含まれている。とくに、学者を産業者に含める位置づけにかんしては、科学への従事を職業とする人々に宛てて書かれた「『産業』著者による第三回状」(1817)に、以下の言及が見られる。

> […]われわれには以下のことは明白に思われる。いずれの階級に属する人々も、ひとつの共通の目的、すなわち有益なものを生産するという目的を持っている。このために、一方の者たちは自然の法則を探求し、もう一方の者たちはそれを応用する。したがって、われわれの考えによれば、学者たちは理論的な産業者であり、そして産業者たちは応用的な学者なのである[31]。

このように、学者については、彼らによって構築された理論が実践的な生産活動に応用され、したがって彼らの仕事が有用性を持つことが説明づけられている。では、芸術家についてはどのように論じられているのだろうか。『組織者』においては、学者や工芸職人と同じ仕方によって、芸術もその分野で獲得された知識が人間にとって有益なものをもたらすとされている。「科学、芸術、工芸において得られた知識を、直接的にであれ、間接的にであれ、応用し、広め、完全なものにしていこうとすることほど、[人間の]境遇の改善に有益なものなど決してなかった」[32]とサン＝シモンは述べる。芸術分野で得られた知識をどのように応用し、人々の境遇の改善をもたらすかは『組織者』では明言されないが、最初期の著作『ジュネーヴ一住人から同時代人への手紙』(*Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains,* 1802–1803)では、芸術家の活動の有用性についてより具体的な言及がなされている。

---

[25] « Prospectus de *L'Industrie* », OC, t. II, p. 1444.『著作集』第2巻、312ページ。
[26] *Ibid.* 同上。
[27] *L'Industrie,* OC, t. II, p. 1487.『著作集』第2巻、341–342ページ。
[28] 強調引用者。*L'Organisateur,* OC, t. III, p. 2120.『著作集』第3巻、264–265ページ。
[29] 例えば『産業者の教理問答』においては、冒頭で「産業者は三大区分をなし、それをわれわれは農耕者、製造業者、商人と呼ぶ」と明言し、学者や芸術家は「産業者階級」から排除されている。しかしながらこの著作においても科学者や芸術家が持つ能力は高く評価されており、彼らが産業者階級と結束する必要性が説かれている。*Catéchisme des industriels,* OC, t. IV, p. 2986 *sq.*『著作集』第5巻、147ページ以下。
[30] *Lettres de deux philanthropes,* OC, t. I, p. 188.
[31] « Troisème circulaire de l'auteur de *L'Industrie* », OC, t. II, p. 1461.
[32] *L'Organisateur,* OC, t. III, p. 2209.『著作集』第3巻、378ページ。

日曜日に、雄弁な話を聞くことはあなた方にとって魅力あることです。よく書かれた本を読むこと、美しい絵画、美しい彫像を見ること、あるいはあなた方の注意を引きつけるような音楽を聞くことに、あなた方は喜びを感じるでしょう。[…]諸君、あなた方の感覚のもっとも繊細な機微に触れながら、あなた方の知性を発達させるのにもっとも適した娯楽によって、あなた方の仕事の合間を満たす芸術家たちに対し、あなた方が報いるのは、理に適ったことではありませんか[33]。

以上の引用を考慮すると、芸術家たちの生み出す作品が見る者、聞く者に喜びを与えることが、人々にとって有益であるとみなされていることが見受けられる。学者であれ、芸術家であれ、彼らの活動によって生み出されるものが人々の欲求を満たすということに有用性の創出があるならば、この点はセーが提示する「産業」と「有用性」の連関と重なり合う。何らかの生産物(学者が構築する理論など、物質的な形を持たないものも含まれる)が生み出されることと、それを人々が享受することが対をなし、有用性がとらえられている。「産業」を定義する際、「有用性」の創出をその根幹としている点が、サン＝シモンとセーに共通する点である。さらにその射程を物質的な生産活動だけではなく、科学や芸術の領域にまで拡大した点が、サン＝シモンの独自性であり両者の概念の相違として立ち現れている。

3　サン＝シモンの「有用性」概念と社会組織

サン＝シモン自身が著作の中で繰り返し述べていることであるが、彼にとって「産業」とは社会が存立するための基盤であり、彼が構想する社会組織の主軸となっている。前節では、サン＝シモンの「産業」概念が学者や芸術家の活動をも包含することを示したが、彼の提唱する「産業体制(système industriel)」あるいは「産業社会」の構築にあたっては、学者や芸術家にさらに大きな役割が委ねられている。社会組織論を構想するにあたり、サン＝シモンが学者や芸術家の持つ「有用性」の議論をどのように発展させているか、本節で論じたい。

サン＝シモンの社会組織論、すなわち産業社会構想を吟味するための前提として、彼の描く社会像をあらかじめ確認しておこう。サン＝シモンによれば、そもそも社会は労働と密接に結びついた状態でしか存在しえないと考えられている。というのも、「社会とは有益な労働に従事する人間の総体であり結合」であり、「われわれはこれ以外の社会を構想することなどできない」ためだ[34]。社会が労働者の集合体からなるものであって、その逆もまた真であるならば、労働者の集合するところに社会があるということになる。このことは『産業』の草稿の一部で、下記のように付言されている。「人々が協同して同じ目的を追求するとき、そこに社会がある。この[社会という]言葉は、それ以外の観念を含まない」[35]。人々が同じ目的を持ち協同する例として、サン＝シモンは製造工場を挙げる。

生産のために協力するすべての人々は、経営者たちも含め、その言葉の真の意味全体においてまさしく実際に社会をなしているが、結合を維持するためにおびただしい力を敢えて費やしている者などいない。そうではなく、彼らは共通の目的を達成するために協力して働くことのみによって結び付けられているのであり、したがって、もし政治において正しい観念を手に入れようとするならば、諸国家をこのようなものとみなさなければならない[36]。

彼が構想する産業体制社会では、成員すべてがひとつの目的に向かって協働することにより、支配によって結ばれた人間関係が解消されると考えられている。もし国家をこのような「産業的大作業場(vaste atelier industriel)」とみなさないのならば、「例えば支配者の利益と被支配者の利益のように、異なり、対立しさえする利益が存在する」[37]ことになる。一方、「全員の境遇の改善」という共通の目的に向かってそれぞれが働くならば、もはや支配側・被支配側の利害の対立は生じない、とサン＝シモンは続けている。このような論理で支配的関係を克服しようと試みるのは、あまりに楽観的すぎるような印象を受けるが、「産業」を社会の根幹とすることにより、社会契約の理論に拠らずして、個人的利益と一般的利益の一致を図ろうとする筆者の意図[38]がうかがえる。

上記の引用からも垣間見えるように、サン＝シモンが構想する産業的な「国家」とは、協働することを通じて成員同士が結びつく、企業に相似した共同体である。言い換えるならば、彼が目指しているのは、社会そのものを産業あるいは会社と同一化していくことである。この点は、『産業』に見出される一文に、より明確な形で表されている。「全人類は共通の目的と利益を持ったものであるから、各人は社会関係において、ひとえに自らを労働者たちの会社(compagnie)に進んで参加しているものとみなさなければならない」[39]。まさにサン＝シモンにおいて「大文字の“Société”[社会]は小文字の“société”[会社]と同一視されている」[40]ことがわかる。ここで特徴的なのは、産業社会や経済的な領域が国家に従属し、介入を受けるような受動的な存在とはみなされていない点、また国家そのものが産業化されることにより、国家と産業社会の区別が失われ、有益な労働に従事する産業者たちによって社会が自発的に形成されると考えられている点である。外的な力による介入を必要とせず、絶え間なく自発的に作り出され、再生し続けるこのような社会を、ギュルヴィッチは「現動する社会(société en acte)」と

[33] *Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains,* OC, t. I, p. 120.『著作集』第1巻、64ページ。
[34] *L'industrie,* OC, t. II, p. 1468.『著作集』第2巻、316ページ。
[35] *Des intérêts politiques de l'industrie,* OC, t. II, p. 1685.『著作集』第3巻、141ページ。
[36] *Ibid.,* p. 1685–1686, note b. 同上、141ページ、註。
[37] *L'industrie,* OC, t. II, p. 1686, note.『著作集』第2巻、141ページ。
[38] この意図は『ジュネーヴ一住人から同時代人への手紙』で先触れされている。モラリストたちの探求の対象であった「個人的な利益が一般的利益と絶えず同一の方向を向いているような状況に人間を置く」という問題に解決をもたらすのが、サン＝シモンが提唱する社会構想であると述べられている。*Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains,* OC, t. I, p. 108.『著作集』第1巻、48ページ。
[39] *L'industrie,* OC, t. II, p. 1498.『著作集』第2巻、347ページ。
[40] Musso, *op. cit.,* p. 35.

評している[41]。産業体制の社会では、企業的な「管理(administration)」が国家的な「統治(gouvernement)」に取って代わり、まさにあらゆる種類の生産的活動に従事する産業者によって担われた「会社」として社会が組織されることになる。

こうした社会像を踏まえた上で、再びサン＝シモンの「産業」、「有用性」概念に立ち戻り、両概念についてさらなる考察を試みよう。セーによる産業の三区分に含まれていなかった学者や芸術家たちの活動をもサン＝シモンは「産業」の射程におさめたが、このことは社会を組織する際の精神的側面にかかわりを持っている。政治経済学の理論が依拠するのは市場の原理と法則であるが、サン＝シモンにおいて、社会の組織を司るものは必ずしもこうした諸法則ではない。すでに見てきたように社会組織の基盤は産業であるとされ、他方でそれを可能にするものは道徳であると考えられている。「共通の道徳的観念なくして、存立しうる社会などない」[42]として、産業的社会の基盤となる産業的道徳の必要性をサン＝シモンは説く。プルードンやマルクスとは異なり、経済活動を通じて析出してくるあらゆる類の社会問題や社会格差を解消するために、サン＝シモンはもっぱら道徳の重要性を指摘する。この道徳は、旧来のキリスト教道徳(「天上の道徳」)に取って代わるべき「地上の道徳」であり、道徳を説く指導者たちが実証科学において獲得された主要な諸知識を身に付けることによって、道徳教育をより「産業的な」ものへと移行させることが可能になると考えられている[43]。

学者たちが理論を構築し、それを産業者が応用するという相関関係は前節で確認したとおりだが、物事の理論的側面の探求と、その応用・実践という構図は、生産活動のみならず、サン＝シモンの社会組織論、とりわけ政治体制の議論において重要性を持つ。「いかなる政治体制も哲学的体系の応用であり、したがって、対応するはずの新たな哲学的体系を事前に確立することなしに、新たな体制を樹立することは不可能」[44]であるとサン＝シモンは述べ、科学・哲学の理論の探究は、政治・社会体制という形での実践と対応すると考えられている。したがって、新たな政治体制や社会体制を構築するため、あるいは社会そのものの存立を確固たるものとするために、人々の道徳的側面へはたらきかけることが必要になってくる。その際、この役割を委ねられているのが、学者や芸術家たちであるのだ。学者や芸術家たちの活動は、何らかの形で人々の役に立つ、心を楽しませるというだけではなく、人々の精神的な側面にはたらきかけ、社会の紐帯をなす産業的な道徳を形作る。『ジュネーヴ一住人の手紙』ですでに、学者や芸術家が人々の精神的側面、ひいては世論の形成に影響力を持つことが指摘されている。

> 世論の支配権があなた方[学者・芸術家]の手中にあることが、おわかりになるでしょう。それをしっかり握りなさい、あなた方は自分自身の幸せと同時代人たちの幸せを作り出せるのです[45]。

学者や芸術家たちが担う精神的側面へのはたらきかけは、個々人の知的な発達や喜びへの貢献にとどまらず、抽象化された社会の成員全体によって共有される「世論(opinion publique)」の形成に影響を与える。この点において、生産物が個々人によって享受、あるいは消費されることに有用性が見出されるという、セーが論じたような「産業」と「有用性」の連関を越えた、社会全体にとっての「有用性」、社会組織を行なう上での「有用性」の観点が提示されていると言えるだろう。有形無形を問わず、何らかの生産物が個々人の欲求や欲望を満たすという「有用性」をめぐる構図がここでは後退し、集合的な社会の成員の世論や幸福に直接寄与するという学者・芸術家の役割が、有益な性質としてとらえられている。

しかしながら、社会の紐帯となる道徳の形成を学者と芸術家に担わせることによって、サン＝シモンにおける「産業」あるいは「産業者」の概念は、ある種の揺らぎを見せることにもなっている。彼らを「産業者」として位置づけ、彼らの活動を「産業」とすることと、彼らがその他の産業者や社会の成員たちをいわば超越し、精神的側面へのはたらきかけを可能としていることは、矛盾が含まれるのではないだろうか。その他の成員たちの世論形成や道徳にはたらきかけているという点で、学者や芸術家たちはある意味で、その他の成員たちからなる集合の外部に位置しているようにも見受けられる。「会社」と化した「産業社会」は、外的な力の介入なくして自発的に生成する、というギュルヴィッチの考えを先に述べたが、学者と芸術家による精神的側面へのはたらきかけは、「外的な力」としてとらえられうるのではないだろうか。

産業全般に対する科学と芸術の位置づけにかんしては、晩年近くの著作『ヨーロッパの革命についての三著作』(*Trois écrits sur la révolution européenne,* 1823)において、以下の通りに述べられている。

> 産業とは、実践であり、実行である。科学とは、理論である。科学の産業に対する絶対的な優越性はまったくない。実践における改善が理論における進歩を決定づけるし、理論が進歩するとき、その逆もまた然りである。[…]産業はしたがって、諸科学と諸芸術の姉妹である。主要な産業者が世俗的主導において高く評価される人々にならなければ、学者と芸術家たちは精神的主導において、重要性を得ることができないのだ[46]。

このように、サン＝シモンにおいて科学と産業、あるいは学者と産業者の間に優劣関係は認められていない。彼らは等しく「産業」に従事し、そこには理論と実践の対応関係が常に見出されている。この間柄に何らかの揺らぎが見てとれるとすれば、それは「(狭義の)産業者」たちが世俗の事柄を担い、学者と芸術家が精神的側面を主導するとい

[41] Gurvitch, *op. cit.,* p. 23. « Société en acte »の訳語については、兒玉幹夫の論攷を踏襲した。兒玉幹夫『「社会的なもの」の探求　フランス社会学の思想と方法』白桃書房、1996年、246ページ。
[42] *L'industrie,* OC, t. II, p. 1574.『著作集』第3巻、42ページ。
[43] *Ibid.,* p. 1579. 同上、48ページ。
[44] *Ibid.,* p. 1570. 同上、37ページ。サン＝シモンにおける哲学的体系と政治体制の対応については、下記研究ノートを参照。白瀬小百合「封建体制から産業体制へ　サン＝シモンの社会思想」『ヨーロッパ研究』第12号、2013年。
[45] *Lettres d'un habitant de Genève,* OC, t. I, p. 111.『著作集』第1巻、52ページ。
[46] *Trois écrits sur la révolution européenne,* OC, t. IV, p. 2836–2837.

う構図が強調されているためであろう。人々、あるいは社会にとっての有用性に着目すれば、ありとあらゆる生産的活動を「産業」内部に包摂することが可能になるが、学者・芸術家が持つ社会組織における「有用性」を強調すると、彼らを産業と対置する位置づけが必要となってくる。サン＝シモンに見られるこのような主張の不整合は、思想的一貫性を欠くものとしてもとらえられうるが、彼なりの仕方で「社会」をとらえ、よりよい社会組織を構想するために辿った試行の痕跡として、肯定的にも評価しうるだろう。

サン＝シモンは自らの「産業」の概念に立脚し、生産物の享受や使用に留まらない「有用性」を見出しながら、社会の物質的な側面と精神的な側面を組織することを志向していたと言える。ジャン＝バティスト・セーの政治経済学における概念、議論を出発点としながらも、考察の対象である「産業」を社会の一部をなす経済活動として位置づけるのではなく、社会の総体としてとらえうるような存在へと発展させた点に、サン＝シモンの独自性があり、まさにこのような「社会」に対するまなざしが、のちの社会科学・社会学の思想潮流を導く礎となったと言えよう。

おわりに

セーの理論を踏襲しつつも、サン＝シモンは「産業」の語に広い意味を持たせ、経済的な活動としてのみならず、社会を形作る基盤としてこれをとらえていた。セーの思想があくまで政治経済学に属するもので、経済活動そのものをもっぱら分析の対象としている一方、サン＝シモンの関心はむしろ産業的活動を媒介とした社会の再組織に向けられている。社会を組織する動因として「産業」を見出した点、そして人々の知的活動や芸術活動をも包含する「産業」概念を梃子としながら社会の組織化を志向した点に、サン＝シモンの思想的特色があると言える。「有用性」のとらえ方をめぐっては、サン＝シモンによる社会組織構想において、個人の欲求を満たす生産物の性質としてのみならず、社会全体の利益に貢献する有益な性質という視点が付与されており、ここにセーとサン＝シモンの間の大きな相違が見出される。さらに、科学や芸術の持つ精神的側面へのはたらきが、サン＝シモンの社会組織論においてとりわけ重要性を持つことを本論文で指摘した。

最後に、研究の今後の展望について言及しておきたい。本論文ではジャン＝バティスト・セーの「産業」、「有用性」概念とサン＝シモンのそれらを比較したが、同時代における政治的・経済的な自由主義、あるいは功利主義の思想に対し、サン＝シモンをどのように位置づけるか、ということを明確化する余地が残されている。また、本論文第3節で「産業」あるいは社会と道徳の結びつきについて検討したが、この点はサン＝シモン最晩年の著作『新キリスト教』(*Nouveau christianisme,* 1825)で取り上げられていくことになる問題である。サン＝シモンにおける宗教の問題を同時代の世俗宗教の隆盛から分析した先行研究は多数存在するが、最晩年の著作ではサン＝シモンの関心が「地上の道徳」から「天上の道徳」へと再帰を見せることになる。今回着目した諸著作で人間の精神的側面に関与すると位置づけられていた学者や芸術家たちの立場が、宗教を論じる際にどのように再定義されているか、という点について稿を改めて論じたい。

フランス語要旨 *résumé*

Industrie et utilité

L'influence de Jean-Baptiste Say
sur la pensée d'Henri Saint-Simon

SHIRASE Sayuri

La pensée d'Henri Saint-Simon (1760–1825) se distingue par les occurrences du mot « industrie ». En effet, avec celles du dérivé « industriel », le mot se retrouve dans plusieurs titres de ses ouvrages, tels que *L'Industrie* (1816–1818), *Du Système industriel* (1820–1821), ou *Catéchisme des industriels* (1823–1824). Aujourd'hui, il est ainsi réputé pour être un penseur de l'industrialisme au XIXe siècle. Le point de départ des réflexions de Saint-Simon est le suivant : comment organiser ou réorganiser la société après la Révolution française ? Érigeant le concept d'industrie au centre de ses idées, il a cherché à construire une société entièrement fondée sur celui-ci. Sa philosophie est considérée comme l'une des sources des courants sociologiques au XIXe siècle.

Saint-Simon doit, toutefois, beaucoup de choses à l'économie politique de son temps. Dans plusieurs textes, nous pouvons remarquer la présence des idées de Jean-Baptiste Say (1767–1832). Bien qu'il lui emprunte les termes d'« industrie », de « production » et d'« utilité », leurs définitions et usages diffèrent. Il passe par l'économie politique sans théoriser à partir d'elle. Il a plutôt eu une réflexion philosophique et donné des pistes pour la sociologie. De là, nous dirions que Saint-Simon se situe entre l'économie politique et la sociologie.

Notre étude s'intéresse aux notions d'« industrie » et d'« utilité » employées par Saint-Simon et Say. Alors que plusieurs recherches précédentes ne s'intéressent qu'aux traits communs entre les deux auteurs, la nôtre posera les questions suivantes : quels sont les traits qui diffèrent ? D'où viennent-ils ? Comment les interpréter ? Nous tenterons d'y répondre et éclaircirons la spécificité et la portée des concepts de Saint-Simon.

Rappelons d'abord que les *Œuvres complètes* d'Henri Saint-Simon ont paru en 2012, ce qui nous a permet d'accéder à l'ensemble de ses ouvrages. Auparavant, il n'existait que des *Œuvres,* incomplètes, et sans ordre chronologique. Grâce

à cette nouvelle édition, nous pouvons désormais consulter tous les manuscrits méconnus et inédits. Au Japon et même en France, les travaux s'appuyant sur celle-ci débutant à peine, nous voudrions donc la mettre en valeur en redécouvrant et en réinterprétant certains ouvrages de notre auteur.

Dans cet article, nous examinerons tout d'abord les notions d'« industrie » et d'« utilité » chez J.-B. Say. Ensuite, nous nous intéresserons à celles de Saint-Simon proposées dans ses ouvrages de la fin des années 1810 au début des années 1820. Enfin, nous discuterons et interpréterons ce qui diffère à leur sujet entre les deux auteurs. Dans la foulée, nous tenterons d'éclaircir l'idée de la réorganisation sociale de Saint-Simon.

Avec son *Traité d'économie politique* (1803 ; 2e éd. 1814 ; 3e éd. 1817), Say met en question l'effet de l'industrie dans le domaine de l'économie et tente de combler les lacunes d'Adam Smith (1723–1790). La théorie de la « valeur travail » est l'une des constructions les plus connues de ce dernier, considérant le travail comme source de la valeur des choses. Selon cette idée, celle-ci est égale à la quantité de travail effectué pour les produire. Mais pour Say, une seule focalisation sur le travail n'est pas suffisante pour analyser l'ensemble de l'économie. Chez Smith, pour qui l'échange des productions ou des marchandises est présupposé comme acte économique, seul le travail est relié à la création de la valeur. Sur ce point, Say semble en désaccord, car il suppose que la valeur n'est pas seulement donnée par le travail : l'industrie y a sa part. Son intention est donc de couvrir les domaines qui ne sont pas forcément désignés par le terme « travail ».

Dans son examen des formes de l'industrie, Say en propose trois types : l'« industrie agricole », l'« industrie manufacturière » et l'« industrie commerciale ». Le commerce lui-même ne produit pas de nouveaux biens matériels, mais il peut être créateur de valeurs en tant qu'industrie. L'auteur explique ce mécanisme en rattachant l'effet de l'industrie à la notion d'utilité. L'industrie agricole et l'industrie manufacturière produisent des choses matérielles, cependant l'important est la création d'utilité et de richesse. La première donne aux trois types d'industries leur caractère productif. Puisque l'industrie commerciale augmente l'utilité des choses en les déplaçant d'un lieu à un autre, elle est considérée comme productive et créatrice. Même si elle ne produit pas exactement, elle n'en contribue pas moins à créer l'utilité qui à son tour donne la valeur aux choses.

Saint-Simon, quant à lui, emploie la notion d'« industrie » dans une acception bien plus large. Dans son ouvrage principal, *L'Industrie,* il propose une brève définition : « l'industrie entendue dans le sens le plus général, et qui embrasse tous les genres de travaux utiles, la théorie comme l'application, les travaux de l'esprit comme ceux de la main ». Par ce terme, il entend toutes sortes d'ouvrages et d'activités productives qui servent à l'humanité. Chez notre auteur, elle se caractérise par sa perspective à l'égard de la production. Dans son texte de 1819 intitulé *L'Organisateur,* il cite une quarantaine d'exemples et décrit des producteurs qui agissent aussi bien dans le domaine scientifique ou artistique que dans celui des arts et métiers.

L'industrie comprenant chez lui « tous les genres de travaux utiles », nous pouvons y voir la trace et l'influence du concept d'« utilité » cher à J.-B. Say. Ce qui distingue Saint-Simon de Say, c'est l'étendue de son concept d'« industrie », qui inclut non seulement l'agriculture, la manufacture et le commerce, mais aussi les sciences et les arts. D'un côté, les savants s'affairent aux recherches et à l'éducation, de l'autre, les artistes remplissent le temps libre des gens par les plaisirs de divertissement. Ces deux catégories d'activité sont considérées comme étant tout aussi importantes et utiles pour les gens, par conséquent, elles sont source de valeur et de productivité. En se basant sur la théorie de l'utilité et de la production de Say, Saint-Simon observe le rôle social des savants et des artistes. Il élargit ainsi la destination du terme et propose une définition personnelle de l'industrie.

S'appuyant sur ses deux concepts d'« industrie » et d'« utilité », Saint-Simon parle de « système industriel » ou de « société industrielle ». Sous ce système social, l'industrie joue un rôle important dans l'organisation de la société elle-même. Il lui accorde de l'importance car elle est une condition essentielle à l'existence de cette dernière. Il suppose qu'une société ne peut exister sans la prise en compte de l'ensemble des travailleurs et de leurs productions. Il la définit comme l'union des hommes qui visent à accomplir un but commun et industriel. Selon lui, les hommes se réunissent et forment société à travers les travaux auxquels ils trouvent un même but et c'est ainsi que s'organise la société industrielle. Saint-Simon la développe au niveau du champ politique et tente même de dépasser la relation nouée par la domination. Pour résoudre cette question, notamment le possible désaccord entre l'intérêt des gouvernants et celui des gouvernés, il utilise l'analogie de la coopération des travailleurs entre eux, y compris avec ou entre entrepreneurs. Quand les gens travaillent pour un même but, la conformité de l'intérêt personnel à l'intérêt général se réalise au travers de l'association. Si les gouvernants et les gouvernés peuvent agir ensemble dans la même direction, pense-t-il, il n'y aura plus d'opposition d'intérêts.

Considérant la société conçue par Saint-Simon, nous voudrions revenir sur ses concepts d'industrie et d'utilité. Comment peut-on interpréter leur importance dans l'organisation sociale ? Alors que J.-B. Say néglige les activités savantes et artistiques lorsqu'il formule les trois types d'industrie, Saint-Simon, lui, les inclut. Ce geste, en effet, se rapporte au côté spirituel des hommes dans l'organisation de la société. Quant à l'économie politique, ce sont les principes et les lois du marché qui servent sa théorie et son analyse, mais chez Saint-Simon, ils ne façonnent pas l'organisation sociale. Supposant qu'« il n'y a point de société possible sans idées morales communes » *(L'Industrie),* il affirme que la société fondée sur l'industrie requiert la morale industrielle. Cette morale est la « morale terrestre » qui remplacera la « morale céleste » soutenue par l'Église catholique, et, selon notre auteur, ce sont les savants et les artistes qui dirigent la première par le biais de leurs ouvrages. À ce sujet, les définitions d'industrie et d'utilité qu'il fournit nous apparaissent particulièrement significatives. Les savants et artistes ont une utilité pour le côté spirituel des hommes et permettent

la formation de la morale industrielle tout en étant le lien social. Non seulement leurs activités font partie de l'industrie, mais elles créent de surcroît le sens moral qui stabilise l'établissement de la société.

La question de la morale est le sujet principal du dernier ouvrage de Saint-Simon intitulé *Nouveau christianisme* (1825). Tandis qu'il tenta de remplacer la « morale céleste » par la morale industrielle dans ses textes précédents, il revint vers la première en lui découvrant le principe susceptible d'améliorer le sort de la classe la plus pauvre et la plus nombreuse. Reste à analyser le statut des savants et des artistes dans la construction de son nouveau christianisme.